拝啓パンダ君

二年　南　幸夫

パンダ君はどうしてあんなに人気があるのだろう。現在でこそ多少おさまって来た感じがするものの、中国から日本にやって来たばかりの日本人の歓迎ぶりは、まさに「熱狂的」だった。パンダブームとまで呼ばれたその人気の高さは、ビートルズ、ジャネット・リン嬢の時に匹敵したと言っても、決して過言ではないだろう。

小生がパンダ君を見に行った時は、平日だったため、ニュースで伝えられていた「二時間待って、たったの三十秒」などといったすさまじさではなかったが、それでも動物園の前には数百メートルにも及ぶ長い列が出来ていて、パンダ君にお目にかかるには、三十分ばかり、長い列をノロノロと歩かなくてはならなかった。

パンダ君の檻は、三千万円とかいう噂である。檻というよりは、邸宅というべきである。その邸宅に住んで、週休二日制の一日二時間労働というのだから、なんともうらやましい話である。パンダ君の縫いぐるみは、世の女の子たちに大モテである。なんだかこちらがパンダ君になりたいような気がしてくる。いったいこの人気の秘密はどこにあるのだろうか？。

日中友好ムードといった政治的な問題は別にして、まず第一に考えられるのは、あのなんとも言えない可愛らしさであろう。現存の動物というよりは、童話の世界から飛び出して来たといった感じのほうがピッタリする。ほかの動物特に熊なんかの縫いぐるみを作るときには、可愛らしさを出すために、本物とは相当違ったものが出来てしまうが、パンダ君は、そっくりそのまま作っても、立派に縫いぐるみとして通用しそうな気がする。

世の中には「なにもなにも、ちいさきものは、みなうつくし」という言葉のように、小さいもの程可愛いという固定観念らしきものがあるらしい。パンダ君はその固定観念を見事に破っている。あれだけの巨体をして、なおあれだけの可愛らしさを持っているのだから、ペットなどとして、可愛がられてきた小動物の持つ可愛らしさよりは別な、スケールの大きさ（可愛らしさにスケールの大きさというのは変かもしれないが）みたいなものを感じている。

第二に考えられるのは、物珍らしさである。アポロが持ち帰った「月の石」を一目見ようとする心理と同じである。パンダ君は世界の三大珍のひとつに数えられていて、その数も極めて少ない。珍らしい物を一目見ようとする心理（どうもこれは、日本人が世界中で一番強いらしいが）が、これだけのブームを呼んだ、ひとつの原因だということは、誤りないだろう

この二つは、おそらく誰でも考えつくことだろうが、小生はもっと別の角度から、この問題を考えてみた。

パンダ君はなまけものである。いかにもノンビリとしていて、寝て食うだけがパンダ君のするすべてのような感じがする。はたから見ていると、いかにもこの世を楽しんでいる感じである。それにひきかえ、この生存競争の激しい現代社会に生きる我々日本人は、毎日コセコセと働いていなくてはならない。パンダ君のようにノンビリ構えていたのでは、たえまち取り残されてしまう。こんな現代人にとっては、パンダ君の、あの悠々自適な様子は、なんともうらやましいものに見えるに違いない。あの人気のひとつの秘密は、ここにあるのではないだろうか。

第四には、前と反対の、一種の同族意識というべきものである。パンダ君のあの表情には、可愛らしさのほかに、たよりなさみたいなものが感じられる。もっと言えば、ひよわさである。実際のパンダ君の生態は良く知らないが、どうみても、きびしい生存競争の中を、自分の力で生き抜くといった感じではない。あれだけの大きな体をしていながら、生存競争の中では、常に敗者となる運命にありそうな感じである。パンダは中国語で「熊猫」というそうである。なるほど熊と猫の合いの子みたいな感じがする。しかし、熊にあるあの獰猛さはまったく感じられないし、猫にある、あの独特な鋭どさもない。いつも何かを恐れ、ビクビクしているといった感じである。そんな様子に、きびしい現代社会の中にあって、常に不安を感じている現代人には、一種の共感を感じるのではないだろうか。この共感みたいなものに、あれだけの人気を呼んだひとつの秘密があるとは言えないだろうか。

最初のふたつはまず確かな原因と言えるだろうが、あとのふたつは、多少こじつけという感じがしないでもない。しかし単なる可愛らしさや、物珍らしさだけでは、あれだけの人気はでて来ないだろう。もっとほかにも原因はたくさんあるのかもしれない。

……

しかし、動物園のパンダ君は、自分の人気にはあまり関心がないらしい。小生がお目にかかったときも、ゴロリと横になって、時々手を振り上げて、愛きょうを振りまいていた。もっとも、そんなことをしていたのはカンカン君のほうだけ、ランランちゃんのほうはソッポを向いて、何ともそっけない感じ。

一日二時間とはいえ、これだけの人気では、さぞ大変でしょう。しかし、人間なんぞというものは気まぐれなもの、こんな人気もそのうちおさまるでしょう。それまでせいぜい頑張って下さい。さようならパンダ君。

論説

深志私観

今の深志の現状を高校生活の理想的姿だと思っている人は、少ないと思う。特に生徒会の活動状態云々となると、これは言うまでもないと思うが、もし今のこの状況——世間の良識あると自認している人々が見たら卒倒するような——が高校生活というものだと思っていたり、又この状態に沈潜していた一種の満足感を覚えている人があったなら、それは一考を要するべき状態だということを認識する必要があると思う。なぜならば、それは基礎を置く所のない、思索というものをすることなしに惰性と怠慢によって生活感情にこびりついた観念だと考えるからである。

我々は高校に来て何をやったというのだろうか。毎日〳〵、単調にくり返される学習だけだという人が多いのではなかろうか。中にはクラブや委員会で活動している人も見られるが、それらの活動を見て、非常に個人的な面が多いように思う。各々が独立して、悪く言えばバラバラに活動している。それでいいじゃないかという意見もあるかもしれないが、それでは一体、深志としての集団の存在意義はどこにあるだろう。なにも意義などとしゃちほこばらなくとも今のこの状態からは、全体として何も得るべきものがないという、集団において当然期待されるべき結果が得られないという事実をあげることができよう。個人に対するあまりの楽観主義、ある意味での性善説は過度の自由放任的社会観を生み、集団を構成する場合においてその集団としての統一を失い、das man つまり統一人格は、頽廃的なそれになりやすい。個人〳〵がしっかりしていれば全体統一など不必要だと考える人もあるかも知れないが、それもやはり集団の個人に対する影響というものをもう少し認識した方がよさそうな観念だと思う。

個人と集団

我々は少なくとも入学時においては、学習の神聖さに対するある程度の憧れと、学究に励もうとする自負と少しばかりのエリート意識を持っていたであろう。まさか入学時から高校生活を現深志のようなものだとわりきっていた人はいなかったであろう。然るに深志集団の一員として一年、二年と生活するに至ると今のような状態を呈するありさまだ。これは明らかに深志という集団の中で個人が影響を受けたという証拠になるであろう。個人〳〵がいかに勝手に行動しようとも集団としての深志が存在する限りそこには統一人格としての das man が必ず存在する。その存在性が認められる限り、我々の各々の個性も日々の行動も、社会の中に於ては、皆ひっくるめられて考えられ、一つの〃深志を代表する気質人〃というものが形成されるに至る。そうした das man とは外的にも内的にも我々を著しく規制する。つまり世間に対して我々の各々は、深志生として対応し、世間も我々に対していわゆる世間に通念となっている〃深志の生徒〃という先入観をもって対応する。世間はいわゆる世間付合に於て、我々の内面、その特性までみて判断し、対応はしない。我々の各々は我々の知らぬ間に世間によって感じられ造り上げられた〃深志生〃にしばられることになるのだ。これが外的な規制であるが内的にもそれはより一層深刻な問題として我々に迫る。それはいわゆる〃同調行動〃とよばれるものに起因する。つまり我々は同一の、深志という集団のエートスに浸っているうちに、そこからある種の共通気分、観念というものを受け、全体として一種の傾向を呈すると同時に個人個人の気質にも〃ある程度の共通した影響〃を受けるというものだ。大衆は盲目であるといわれたり、集団心理学などという学問が存在するのもこの所以である。人間はもともと弱いもので特に現代の社会のような状況になると、一人で生きてゆくなどということは、実質的にも精神的にもほとんど不可能なことであるし、またそうした個人とは、本来人間が有すると考えられている周囲との同調性、模倣性という性格を著しく助長させるものである。こうした人間に内在する性格のために集団における同調性が認められる訳だが、それは集団の個人に於る影響の中で最も重視すべきものだろう。なぜならそれは我々の精神面に多くを及ぼすからだ。それの束縛は我々の学校生活ばかりでなく、学習や延ては人生そのものにまで影をなげかける。深志という集団に属する以上、それからのがれることはできない。それは我々の意志とは関係なしに、生活のすき間から、知らず知らずのうちに侵入し我々の心奥に巣くう。

我々は未社会人であるので、我々の所属する集団はほとんど深志に限られていると言ってよいであろう。であるから我々は深志を考えずに学校生活を送り、また社会に対して意見をもつことはできない。我々は深志生である以上、深志と共に歩まねばならぬのだ。この事実がある以上我々は今までのような深志集団に対する無関心と集団生活に対する甘い観念を捨てねばならぬことに気づくであろう

我々の世代はちょうど概念拡張に於ての周辺人として扱われ、その性格を有する。つまり青年期にみられる特殊な不満不安劣等感を有すると同時にそれを裏返すところの誇張、奇矯、強がり、自己顕示を示すという性格を全体として持つということだ。こうした大人と子供の中間に位置する我々は当然完全な思考も判断もできないであろうし、その集まりである深志も集団として構成員皆が満足できるような、またそのすみずみまで整い完成された状態にはなりえないだろう。そこに期待されるべきは完成された姿ではなく、むしろ思索し葛藤する姿だ。ここではっきりさせておくべきことは、我々が意味する深志集団とは即深志生徒会であるということだ。生徒会とは文字通り生徒のための生徒による生徒の集団であるから、先程述べたように我々の生徒としての学校生活はすべてその生徒会を通してその中で行なわれるべきであろう。本来ならば深志における生徒はすべて生徒会を考えずにはなし得ないというのが当然だろう。現状に行き詰まったからといって安易に生徒会解散などと言ってはいけない。くり返し言うが生徒会は我々生徒にとって必要欠くべからざるものである。それをつぶすということは、我々の生徒としての権利を放棄するに等しい。生徒会は生徒にとって敵対視すべき存在ではない。活動が行なわれなくとも広い意味での精神的な生徒会は我々が深志生である限り存在するのだ。現状が生徒会を必要としていないなどといってみても学校生活を成立させる為にはなんらかの活動が行なわれるはずだ。それが生徒会なのである。決して本部があって委員会があって云々というような形の組織の名称ではない

以上集団、生徒会の一般論めいたことをくどくど述べてきたが、とにかく集団が、生徒会が必ず存在しそれが我々会員個人個人に影響を及ぼし、我々はそれに無関心であったりそれを避けて通るようなマネをすることが、いかに我々の高校生活を無意味なものにしてしまうかということがわかっていただけたと思う。

深志イデオロギー小論

本来ならばこの標題のもとに話を進めるつもりでいたのであるが現在の状況ではまず会員の諸君に生徒会に気を向けていただくということが先決問題であると思われたので、一般論にそのスペースを譲った。ここでは極簡単に箇条書き程度に留めておいて、また後日にその機会をみつけようと思う。

・歴史はくり返すといわれるように生徒会の活動史もここ十年というもの今のような状況を継続しつづけている。しかも同じ状態にありながら縦のつながりというものが全くなく、同じことを毎年くり返しくり返しやってそして準備不足と一年という短すぎる役員の任期のためにこれといった成果はあがっていない。これは非常にムダであると思う。結果・結論がすべてではないが、もう少し知識を広く求めてもよかろう。

・そのために具体的な組織として資料室を設置すべきであると思う生徒会で一つの目標とされている文化的活動もそうしたことからやりはじめるべきだろう。

最後に会員の皆さんの参加を期待するものである。

寄稿

雑感

「青春」とは、いったい何だろう。青春を生きるとは……。はたして私は生きているのだろうか一冊の本が、私に様々なことを考えさせた。

毎日の生活を考えてみると「私はほんとうに生きているのかなあ」と思う。いったい私は毎日何をしているというのだろうか。これといって熱中している物があるわけではない。かといって一生懸命勉強するわけではないし、遊ぶわけでもない。ただなんとなく過ごしているだけだ。惰性と怠惰ということばが、まさにぴったりとしそうな生活である。「生きている」という実感がまるでない。このまま、なんとなく三年生になってしまい、なんとなく卒業するのかとそう考えるとなんだかとても恐しくなってしまう。しかし、問題はそんなことではない。そう考えながらも、どうしようともしない私自身である。惰性と怠惰の生活は、確かに楽しい。けれど、いつでもその裏にあるものは、とてつもなく大きな空しさである。私は時の流れに追いついてゆけない。今、私に一番必要なのは、自分自身を、生活をゆっくり考えてみる時間。けれど、いつも何かに追いかけられているようでそれさえもない。いや、つくりだそうとしないのかもしれない。見せかけの楽しさだけの生活でいいわけはない人生とは厳しいものである。自分自身を厳しく見つめるべきであると、理屈ではわかっていても、そこが自制心の弱い者の悲しさである。つい楽しい方へ走ってしまうそのくせ深刻に悩む。「いったい私は、何のために生きているんだろう。私という人間の存在価値はあるんだろうか。生きていたってしようがないんじゃないか。」しかし、死のうとは思わない。それどころか、八十すぎまで生きたいと思っている。私の精神構造はおかしいんじゃないかと心配になってくる。けれど、事実、この頃そんなことばかり考えている。初めにも言ったように一冊の本の影響である。それは、一女子大生の日記『二十歳の原点』である。そこには彼女の真実を求めようとした前向きの姿勢がある。若さゆえの無鉄砲さがある。そして自分を、社会を見つめる厳しい眼がある。私は、とてもうらやましかった。私は、はたして前を向いて歩いているだろうか。厳しさを持っているだろうか。否、私はどんなことにもたやすく妥協し、下を向いてこそこそと歩いている。私に若さがあるだろうか。否、私は何をするにも、いつも周囲の眼を気にして、無鉄砲なことなんてできない私は生きてない。私は若くない。どうしてこんなに無気力なんだろう。どうしてこんなに臆病なんだろう。とても悲しい。とにかく、今の生活から脱しなければ。「現状維持」ということばがある。もし私が、今の生活を続けていくとしたら、それははたして「現状維持」だろうか。いや違う。それはただの「現状妥協」でしかない。安易な妥協でしかない。生活していくうえに、妥協するということが必要なのは確かだと思う。けれど私たちの身のまわりには、たやすく妥協していることが案外多いのではないだろうか。「二十歳の原点」の彼女が未熟であるといっていたように、私もまた未熟である実にちっぽけな存在でしかない。けれどそれなりに批判と、生きがいを持った生活をおくりたい。いやおくるべきだと思う。「私は生きています。」と自信をもって言い切れるような生活をしたい。

さて「裸のつきあい」ということばがある。しかし本当に人間は何の飾りもわだかまりもないつきあいができるのだろうか。私は常に自分をつくってしまう。友人との雑談中にも、ついカッコイイことを、心にもないのに言ってしまったりする。それが熱心な会話であればあるほどそんな傾向が見える。愛について、人生について、私は熱弁をふるう。しかしそれは相手に驚異を与えよう。自分の存在を認めさせよう。という醜いエゴイズムの表われでしかない。だから話し終わったあと、私は妙に空虚になる。私の内には何も残らない。ただ空しさだけである。話している最中にも「あー。私は心にもないことを言っているなあ。」と思うことがある。それでも言っている本人が驚くほど（聞いている人にとってはそうたいしたことはないのかもしれないが）立派なことばが口をついて出てくる。あまりのエゴイズムの強さに内心びっくりしてしまう。誰にもエゴイズムはあるだろう。本当に「裸のつき合い」なんてできるのだろうか特に私自身に関しては。もっと正直になりたい。

『二十歳の原点』を読んで、私はいろいろなことを思った。若いということ、生きるということ、そして……死。高野さんは自殺してしまった。挫折感からであろうか。わからない。ただひとつわかっていることは、私は死ねないということ。たとえどんなことがあったとしても、やはり生きていたい。自分の命を自分でたつということは、恐ろしいことだと思う。自殺する人間は、強い人間かそれとも弱いのか、私にははっきりとはわからない。けれど死んでしまったのでは現実に背を向けたことになる。やはり、現実にまっこうからぶつかりたいものである。

彼女が未熟であったようにまた私も未熟である。未熟なりに希望を持って一生懸命生きていけたらと思っている。（M）

ある季節の終りに

三年　Y・S

クロが死んだ時、ぼくの心を襲ったのは「今、何かの時代が、季節が終った。」という空虚な気持だった。それはあのユーモラスな雑犬が死んだことによる、動物愛に起因する空しさではなかった。それはクロが存在した深志において何かが終りを告げた印だったと思う。

もう二度と、クロのようなかたちで一動物が深志に存在することはあるまい。ああも自然な形で存在する事は深志において、今の社会において不可能だという空しい感情が頭をもたげてくるのだ。

クロはある季節の生き残りだったのだろう。クロはある時期の深志における連帯の象徴だった。クロは十年前に十分生きたのであった。そして生徒が代わり、時代が変わり、その連帯が崩れ去ってしまっても、クロは十年前のクロの存在として生き残り、温存され続けた。ちょうどグァム島の横井さんのように、クロは十年前の連帯の中で生きていた。すでにその連帯が崩れ去った今、それが偽善とも、表面上の単なる動物愛とも、単なる懐古趣味だとも知らずに、クロは今の深志があたかも十年前の深志のように思っていたに違いない。

そして、ぼくたちは、クロを見ると、自分の中で燃え落ちた連帯意識の灰の中にかすかに残る燃えかす同然の連帯意識を解発されるのである。やはり、クロは一種のカスガイ的役割を果たしていたようだ。それを感ずることは、ぼくらには辛いことであった。だからクロがテレビに出、そして新聞に雑誌にと登場した後で、深志を思い返した時、ひどく辛く、悲しく空しかったのだ。

長野高校へ行っている友達に、「テレビ見たよ。あんなとこが深志のいいとこだな。」と言われて、「いやちがう。あんな深志らしさはもうないんだ、ほんとうは。」とぼくは言えなかった。それどころか、何かうれしい気持にさえなったことを思い返して、なんと自分自身がみじめに見え、そして深志を見返す事が辛かったことか。こんな気持は、今の深志の生徒以外にわかるはずがない。

「深志はいい学校だ。」と外部から言われる頂点にクロの存在があった。そして深志生の心の中で頂点を占めていたのは、流会した生徒大会であり、空しいトンボ祭だった。

もうやめよう。クロを前面に出すことを。偽善者になることを。

クロは死んだ。ある光彩に満ちた時代の象徴が消えた。死んだ翌日、今年はじめての雪が降った。そして、以前の深志の季節は終りを告げたのだ。

クロの記念碑を作ってもいいと思う。その裏に、ここに深志らしさは終ったと印そう。

そして、ぼくらのすべき事は、この空しさから出発して新たな深志を作ることだろう。空虚からの発端なのだ。しかしぼくがこう奮い立たせても、何も動じない自分自身を、深志を、そしてその集団としての社会を考えて、ひどく暗い気持になってしまうのだ。

編集後記

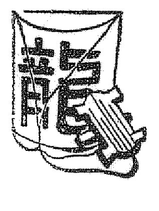
▽師走の声を聞きはじめるころ編集にとりかかり、あわただしさに拍車をかけて急きょ作成した一三八号である。当初生徒会と寄稿などの二面構成の予定だったものが、十一月三十日のクロ急死により予定を変更し、四面構成で二、三面をクロのことで埋めてみた。

▽クロについては様々な見解があると思う。生徒会でもアンケートなどをとって死後のクロのことを考えているようである。果たして一匹の犬（確かに特別な犬であったが）に対して、そこまで対処する必要があるか、新聞に特集まですることなのか、などと考える校友も少なくはあるまい。しかし、クロの死というものは、やはり単なる「一匹の犬の死」だけではすまされないものがあるように思うそんな観点にたって、クロを新聞に載せてみた。弁解じみたことであるが、別にクロクロと騒ぎたてる意のなきこと（結果的にそうなってしまったかもしれないが）は了承してほしい。

▽大体、今回の新聞はほとんど依頼原稿ということで、我々が手を抜いたものだと見られても仕方あるまい。確かに、この新聞は義務感に迫られて作ったというのが本音である。そして、そこからは新聞のあり方、存在性が問われてくるのである。昨年の予算案審議において、この問題が問われ、わずか十一票という小差で廃刊を免れた新聞である。しかしその後発行されたのはわずかである。別に回数さえ多ければいいというわけではないが、そうかといって満足のいける新聞が作られたわけではない。このままいけば昨年の徹を踏むのは目に見えるようである。ともすれば、新聞廃刊ということもありうるかもしれない。校友諸君に予算のむだ使いであると判断されれば、それもいたしかたのないことである。だが、そう判断するときには、よく考えてほしい。新聞のあり方——これを論議するのはなにも昨日今日に始まったことではない。数年前からの新聞のこの「編集後記」を読んでみれば毎回のことのように問題となっているのである。にもかかわらず、現在も結論はでない。あるいは、もっと現実に即した具体的なことを考えろ、と言われるかもしれない。しかし、この問題は、何事もの大前提となるべきものではないだろうか。

▽とにかく、一三八号はなんとか完成をみた。何かしっくりいかないものを数々残して。

校友諸君の真の意見を待つ！



文具
印刷
伊勢町中央
桂林堂
TEL（32）2301・2810

スポーツ用品　伝統と信用のデパート
ヤマトヤ
松本市大手4丁目（上土商店街）TEL（代表）32—3600
駅前支店　松本市深志1丁目（西五町通り）TEL33—9850

大衆食堂
つかだ
お気軽にお出かけ下さい
TEL（33）7479

学生の店
松本市蟻ケ崎3丁目5—14
深志明倫堂
電話 32—4980番

原稿急募!!
内容何でも可
お待ちしています
校友誌編纂委員会

お食事・喫茶
山脈（やまなみ）
松本・蟻ケ崎郵便局隣
TEL 33—7453

新しい話題は洋画から……
暗殺虐殺〝マフィア〟の全貌をあばく
マフィアとは呼ばない！彼自身コーザ・ノストラと呼ぶ！
バラキ
チャールズ・ブロンソン　リノ・バンチュラ
12月23日より
絶賛上映中!!
前売券は図書館にあります。
松本中劇　32—0834
東京と同時！県下独占ロードショウ

参考書は　受験研究社版
3色刷　自由自在
日本史 900円
世界史 930円
倫理・社会 550円
地理 980円
地学 650円
化学 980円
数学Ⅰ基礎 370円
数学ⅡB 380円
発刊以来1000万の読者を育てた参考書の決定版〈自由自在〉シリーズに、いま続々生まれている高校用新版です。すばらしい多色印刷、独創的な図版で学習内容を確実に身につける本格派として好評です。
英文解釈キーテストシリーズ
重要構文Key Tests
重要語句Key Tests
各220円
コア エッセンス シリーズ
年表対照 日本史
年表対照 世界史
各600円
■精選された段階式問題集
標準問題集
高校用／現代国語・古典・読み方書取り・倫理社会・政治経済・日本史・世界史・地理・地学・数学ⅡB・数学Ⅲ・物理・化学・生物・地学・英語基礎・英語中級・英語上級（各解答別冊付）180円〜200円
教科書併用基礎実力養成に要点整理付段階式問題集■姉妹編大学受験／既刊12点
■要点整理付／大判記入式
HIGH CLASS TEST
現代国語・日本史・世界史・地理・数学Ⅰ・数学ⅡB・物理・化学・生物・地学・英語基礎・英語中級 280円〜300円
入試必須事項の整理と実戦力養成のための大型版（B5）で、直前の整理に、高度な模擬試験に活用できる記入式テスト。
受験研究社版のそろっている　鶴林堂書店　松本市大手3丁目／TEL. 2-5340